

20. 日本において正しい家庭科の成長を妨げていたものについての分析

東京家政大 常見 育男

1. 家庭科は明治大正昭和の三代に亘る約80年間女子教育における中枢教科の地位にあった。然るに現状はどうか。これに対する過少評価はもとより、これが存立的基礎すら崩壊しようとしている。この間の女子教育発達史は反面では家庭教育衰退史の観を呈している。ここに於て最も重要なことは家庭科がかかる運命を辿らねばならなかった過程についての歴史的理論的究明でなければならない。

2. 家庭科の正しい成長を妨げていたものについての分析(家庭科教育史)は、女子教育思想、家庭科教育思潮、家庭科に関する法令、家庭科教科書生活革新に対する家庭科の寄与等について時代的に分析検討考察して、そこに流れる法則性を究明することである。

3. 明治以来家族的國家観、家族制度、江戸以来の女訓書の精神を基調とした女子教育方針が国定として固定し堅持されていた。これが正しい家庭科の成長を妨げていた根源である。これを分析すれば左の三点に要約できる。

- ① 家族関係の不合理性を批判することが否定され、家庭科は家庭の近代化と民主化を妨害する一役を担ってきた。
- ② 家庭は社会的生産に伴って変異する事実に眼を蔽わせ家庭科を技能習熟に定着させ経営の教科としなかった。
- ③ 自家中心利己中心の教科に停滞させ、家庭経営の協同化・連帯化の理念を妨げ、家庭科を広い社会的基盤の上に成長させなかった。